

解 答

□

- 1 ア 2 一般的なルール 3 エ 4 イ
 5 A ア B ウ C エ D イ 6 求められる個性 7 共通性
 8 人間は通じないものを持っているので、「個性」というものを表に出すと、必ず争いごとが起きてしまうから。
 9 ウ 10 (1) エ (2) ア 11 イ 12 ア
 13 初めから与えられているもの

□

- 1 A イ B エ C ア D ウ 2 ア 3 ア 4 エ
 5 働きかけ 6 ポップなところ
 7 三組の合唱がうまくいくように、吉沢君に協力をたのむ台詞を昨日一緒に練習してくれたこと。
 8 ウ 9 ① イ ② ウ ③ ア ④ エ 10 ウ
 11 (1) 十五分の歌練習の時間
 (2) みんながちゃんと歌ってくれないから

12 エ

□

- 1 辞書 2 関節 3 暗記 4 印象 5 降雨
 6 屋外 7 加害者 8 発覚 9 残念 10 鉄筋
 11 はか〔らう〕 12 とな〔える〕 13 ぞうきばやし 14 ひつだん 15 でんえん

解 説

□

出典は、養老孟司『バカの壁』。

- 1 ——線部の文は、「少しも個性的ではない」の意。学問の世界でも個性を求められながら、論文を書くにあたっては英語を共通語として使うようにと、非個性的な決まった形式を求められるのはおかしいということ。ウは「個性は学問の世界にしかない決めつけ」が不適切。そのようなことは述べられていない。
- 2 仕事をするうえで全員が同じように理解しておくこと、つまりマニュアルのことである。「マニュアル」では五字で、「七字で」という条件に合わないが、第七段落で「マニュアル＝一般的なルール」と言い換えている。
- 4 「具体的に仕事をやれば、どういう手順がいいのかなんてことは、わかってくるもの」「……仕事をやっているうちにわかること」と述べられている。筆者は実際に仕事を通して身につけることが大切であると考えているのである。
- 6 末尾近くに書かれている松井秀喜選手、イチロー選手、中田英寿選手などの、筆者が考える本当の個性ではなく、文章の冒頭から話題にされている、人々が世の中や会社から「個性を発揮せよ」と求められている「個性」、つまり「組織が期待するパターンの『個性』」である。それを「七字」で表現した言葉は、「求められる個性」。
- 7 ——線部の文が「だから」で始まっていることに注意する。したがって、「言語から抽出された論理」が「圧倒的な説得性を持つ」理由は、前の文に書かれているはず。つまり、「人間の脳の意識的な部分」（言語もそれに含まれる）が「個人間の差異を無視して、同じにしよう、同じにしようとする性質」を持っていることがその理由になる。「同じにしよう、同じにしようとする性質」を「三字」で表した言葉が、前の段落にある「共通性」。「共通性を徹底的に確保するために、言語の論理……がある」とあることから考えることができる。
- 8 ——線部の直前に「こう考えていけば」とあることに注意する。「こう」の指している内容が、「個性を伸ばす」ことを筆者が「馬鹿なこと」と考える理由である。「こう」が指しているのは直前の二文。「もともと人間、通じないものを持っている」ので『『個』というものを表に出した文化というものは、必ず争いごとが起きている』から、「おまえの個性を伸ばせなんて馬鹿なことは言わない方がいい」というのである。
- 9 教育も「意識の世界」であり、そこでは「互いに通じることを中心」に、たとえば「親の気持ちが分かるか、友達の気持ちが分かるか、ホームレスの気持ちが分かるか」というようなことを教えるべきなのに、「おまえの個性を伸ばせ」などと争いごとのもとになるようなことを言っているのは、大事なこととそうでないことを逆さまにとらえている（＝逆立ちしている）からだ、というのである。
- 10 バナナの皮をむけば皮とはまったく違う中身が現れるけれども、ラッキョウの皮をむいてもまた同じような皮が現れるだけである。ラッキョウの皮をむいたことがなければ、タマネギの皮をむいたときのことを考えても同じこと。次々同じようなものが現れて、どれも大差がないことが「ラッキョウの皮むき」。四字熟語で言えば「五十歩百歩」、ことわざで言えば「どんぐりの背比べ」。
- 11 彼らには「神様というか親から与えられた身体の天分があった」と述べていることに着目する。「身体の天分」と

は、生まれつきの身体能力の高さのこと。「生まれつき」持っている「身体能力」だから他人には「真似できない」のである。「神様……与えられた身体の天分」とは生まれながらに持っている高い身体能力、ということで、エの「神様から選ばれた運」ということではない。

- 12 二軍の選手がイチローの十倍練習しても彼に追いつけないのは、イチローのような天分を神様や親から与えられなかったから。つまり、私たちには生まれつき持っている能力＝「もともと与えられているもの」しかないのだというのである。
- 13 皮膚を切り取って他人に植えても絶対にくっつかないという話の後ろで、『個性』なんていうものは初めから与えられているものであって、それ以上のものでもなければ、それ以下のものでもない」と述べていることに着目。

㊦ 出典は、瀬尾まいこ『幸福な食卓』。

- 2 ——線部の直後の段落「情けないなあ」から「だめだ」までをよく読み、「私」がどんなことを情けなく思ったから「涙が出てきた」のか考える。「みんながちゃんと歌ってくれない……ことでどうしてこんなに悩まないといけな
- いんだろう。大浦君まで巻き込んで、こんなの……だめだ」と自分を情けなく思って涙が出たのである。
- 3 「中原傷ついているよな」「毎朝、俺、みんなと一緒にふざけてるけど、中原のこと本当、かわいそうだなあって思ってんだ」という言葉から、朝の合唱練習がうまくいなくて「私」が悩んでいることを、さらに「俺、協力するよ」という言葉から、練習がうまくいくように「私」から協力を求められているのだということを、「吉沢君」がわかっていたことを読み取る。
- 4 「俺に相談してくれてありがとう」「他にも男子いるだろう。なのに、中原が俺を選んでくれたって、なんだかちよっと嬉しい」という「吉沢君」の言葉から考える。
- 5 二番目の場面（増田君と違って～歌い上がった）では、「吉沢君」が「へらへらちゃかしながら」も率先してみんなの前で歌を歌い、「みんなちよい、まじで歌おうぜ」と呼びかけ、みんなで「ふるさと」を歌い上げることができた様子がかかれていて、そのことを「吉沢君の働きかけでようやく声を出すことができた」と表現している。
- 6 指示語の指す内容が、指示語より後に書かれているので注意する必要がある。「私」に「そういうとこ？」と聞かれて、「大浦君」は「他の女の子みたいにさ……」と「そういうとこ」について「今日の吉沢君かっこいい。とか、三宅君の髪型決まってるよねえとか、数学の清水ってきもい！とか」と例をあげ、それらを「そういう会話を飽きずに毎日繰り返すポップなところ」とまとめて言っている。
- 7 「三組の合唱がうまくい」くように「吉沢君」に協力を求めたとき、「昨日、大浦君と練習した台詞を思い出してみた」こと、その一緒に練習した台詞とは「えっと、私困っていて、助けてほしいの。吉沢君が頼りなの。一人じゃ無理だから」と、吉沢君に協力をたのむ台詞であることを読み取って、「大浦君」が「私」のためにしてくれたことをまとめること。
- 11 (1) 「学級委員だったから……深刻にやってのけた」ことは、合唱の練習。そのことを「十字」で表した表現を探す。
- (2) 「学級委員じゃなかったら、きっと私だってまともに練習しなかった」というのだから、学級委員だった「私」は「まともに練習し」たが、学級委員でないみんなは「まともに練習しなかった」のであり、それはクラスをまとめる責任のある学級委員の「私」にとっては「深刻」だったはず。ただし、「まともに練習しなかった」や「適当にやっていた」では、「二十字以内でぬき出して」という問題の答えとしては短すぎるし、「理由」を聞かれているのだから答えの末尾は「～から」とか「～ため」という終わり方になるはずで、どちらも答えとしてふさわしくない。同じような意味の言葉を他の部分から探してみると、「吉沢君」に協力をたのむ場面に、「みんながちゃんと歌ってくれないから」という表現が見つかる。
- 12 この場面は交流会本番の日のことなので、交流会本番の日を「あの日」というはずがなく、アは間違い。——線部の直前に「おばあさんが深々と頭を下げるのが、こんなにも心に入ってくるのは」とあるが、それをふまえているのがエの後半部である。